

ディクトグロスを応用した音楽聴取プログラムの実践とその効果 — 小学校2年生を対象とした調査 —

吉永 早苗¹⁾ 高橋 幸子²⁾ 小松 正史³⁾ 下郡 啓夫⁴⁾ 澤田 陽一⁵⁾
佐野 和貴子⁶⁾ 岡田 香織⁷⁾

¹⁾ 東京家政学院大学 ²⁾ 姫路大学 ³⁾ 京都精華大学 ⁴⁾ 函館工業高等専門学校 ⁵⁾ 岡山県立大学
⁶⁾ 浅口市立金光竹小学校 ⁷⁾ 岡山市立江西小学校

Effects of a music listening program applying the “dictogloss” technique:

Experimental research on second grade elementary school pupils

Sanae YOSHINAGA¹⁾ Sachiko TAKAHASHI²⁾ Masafumi KOMATSU³⁾
Akio SHIMOGOORI⁴⁾ Youichi SAWADA⁵⁾ Wakiko SANO⁶⁾ Kaori OKADA⁷⁾

¹⁾ Tokyo kasei gakuin University ²⁾ Himeji University ³⁾ Kyoto seika University

⁴⁾ National Institute of Technology, Hakodate College ⁵⁾ Okayama Prefectural University

⁶⁾ Konkotake Elementary School, Asakuchi City ⁷⁾ Kosai Elementary School, Okayama City

小学校音楽科では、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けることが求められている。しかしながら、「何を聴取すべきかわからない」児童の存在や、「思うことはあっても言葉で表現できない児童に対しての支援の方法がわからない」教師の悩みが指摘されている。

本研究では、ディクトグロスを応用した音楽聴取プログラムを経験した小学校2年生の気づきのメモを分析し、その効果について検証した。調査は、2018年と2019年に、西日本の2つの公立小学校2年生70名の協力を得て、両年とも朝学の時間(20分)に8回の音楽聴取課題を実施した。児童は気づきのメモに基づき、音や音楽の変化について仲間と議論した。その結果、本プログラムを経験することにより、児童は「意識を集中して音楽を聴取する」ことを学び、「音楽の知識について体験を通して理解し」、そのことによって「音楽を聴取して感じたことを言語化する力を身につける」ことがわかった。

キーワード：小学校音楽科、言語活動、音楽聴取プログラム、ディクトグロス

In order to develop the language ability specified in the National Curriculum Standards for elementary schools, each school should put in place the necessary language environment and enhance the language activities of the pupils in accordance with the characteristics of the subjects. Elementary school teachers often say that they do not know how to support pupils who cannot express themselves. It is necessary to help such young learners express themselves by enhancing their conceptual knowledge and language ability.

This study aimed to analyze the memorandums that second graders made while experiencing a music listening program and sought to verify the effect of the program on their language skills. The survey was conducted in 2018 and 2019, with 70 second graders from two public elementary schools located in the western part of Japan. As part of the music listening program, a discussion applying dictogloss was conducted. A total of eight sessions lasting 20 minutes each were conducted during school hours. Pupils listened to music and discussed eight slightly different musical pieces with their peers in the course of these sessions. Teachers' comments and pupils' statements show that by experiencing this music listening program and by engaging in a discussion on the dictogloss technique, the children learned how to focus on listening to music and understood music knowledge through experience. By interacting with their peers, they acquired the ability to verbalize and express themselves. Further research is needed to collect more data.

Keywords: elementary school, music class, language activity, music listening program, dictogloss

-
- | | |
|---|---|
| 1) 東京家政学院大学
〒194-0292 東京都町田市相原町2600 | 1 <i>Tokyo kasei gakuin University</i>
2600 Aihara, Machida (194-0292) |
| 2) 姫路大学
〒671-0101 兵庫県姫路市大塩町2042-2 | 2 <i>Himeji University</i>
2042-2 Oshio, Himeji (671-0101) |
| 3) 京都精華大学
〒606-8588 京都府京都市左京区岩倉木野町137 | 3 <i>Kyoto seika University</i>
137 Iwakura Kino, Sakyo, Kyoto, Kyoto (606-8588) |
| 4) 函館工業高等専門学校
〒042-8501 北海道函館市戸倉町14-1 | 4 <i>National Institute of Technology, Hakodate College</i>
14-1 Tokura, Hakodate (042-8501) |
| 5) 岡山県立大学
〒719-1197 岡山県総社市窪木111 | 5 <i>Okayama Prefectural University</i>
111 Kuboki, Soja (719-1197) |
| 6) 浅口市立金光竹小学校
〒719-0102 岡山県浅口市金光町下竹315 | 6 <i>Konkotake Elementary School, Asakuchi City</i>
315 Shimodake, Konko, Asakuchi (719-0102) |
| 7) 岡山市立江西小学校
〒709-0854 岡山県岡山市東区瀬戸町江尻1399-2 | 7 <i>Kosai Elementary School, Okayama City</i>
1399-2 Ejiri, Seto, Higashi, Okayama (709-0854) |

1 研究の背景と目的

1.1 小学校音楽科の目標

平成29年に改訂された小学校音楽科の教科の目標は、以下の通りである。

表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを旨とする。

- (1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。
- (2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。
- (3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。

今回の改訂にあたっての基本的な考え方として、小学校学習指導要領（音楽編）には、次の3点が挙げられている¹⁾。

- ・音楽に対する感性を働かせ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさなどを見いだしたりすることができるよう、内容の改善を図る。
- ・音や音楽と自分との関わりを築いていけるよう、生活や社会の中の音や音楽の働きについての意識を深める学習の充実を図る。
- ・我が国や郷土の音楽に親しみ、よさを一層味わうことができるよう、和楽器を含む我が国や郷土の音楽の充実を図る。

これらの改善事項を踏まえ、教科目標の実現に向けて、学習内容、学習指導の改善・充実のための4つの視点が設けられている。

- ① 「知識」及び「技能」に関する指導内容の明確化
- ② 「共通事項」の指導内容の改善
- ③ 言語活動の充実
- ④ 「我が国や郷土の音楽」に関する学習の充実

この4つの視点のうち、④は前述の基本的な考え方の3番目の視点に準拠する内容である。一方

①～③は、音楽科の学習内容、学習指導の全体に拘る視点となっている。

1.2 音楽科における言語活動の充実

前述の③言語活動の充実については、学習指導要領解説の第4章の2内容の取り扱いと指導上の配慮事項に、「音楽によって喚起されたイメージや感情、音楽表現に対する思いや意図、音楽を聴いて感じ取ったことや想像したことなどを伝え合い共感するなど、音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けられるようにすること」と示されている。学習指導要領解説（p.8）によれば、中央教育審議会答申において、言語活動が「表現及び鑑賞を深めていく際に重要な活動である」とされたことを踏まえ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさなどを考えたりしていく学習の充実を図る観点からの改訂である。

この「言語活動の充実」は、平成16年の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」に端を発しており、ここでは、「学校教育においては、国語科はもとより、各教科その他の教育活動全体の中で、適切かつ効果的な国語の教育が行われる必要がある。すなわち、国語の教育を学校教育の中核に据えて、全教育課程を編成することが重要であると考えられる」などと指摘されている²⁾。

そして、平成20年の答申において、思考力・判断力・表現力を育むために、例えば次のような学習活動が重要であると示された。

- ① 体験から感じ取ったことを表現する
- ② 事実を正確に理解し伝達する
- ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする
- ④ 情報を分析・評価し、論述する
- ⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善する
- ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる

音楽科における「言語活動」のあり方について、吉田³⁾は、「広い意味での言語活動」と「狭い意味での言語活動」に分けて説明している。前者は、答申において、学習活動の基盤となるものが「数式などを含む広い意味での言語」と示されていることから、音楽科においての言語活動について、音楽そのものをコミュニケーション活動として捉える考え方である。後者はいわゆる「言語活動」であり、音楽科においても言葉を使ったコミュニケーションを重視する方向が明確に示されたのである。

1.3 問題の所在

前項において、言語活動が「表現及び鑑賞を深めていく際に重要な活動である」と述べた。この、表現及び鑑賞を深めていく言語活動に重要な要素となるのが、〔共通事項〕に示された内容である。〔共通事項〕とは、表現及び鑑賞の学習において共通に必要な資質・能力であり、表現及び鑑賞の指導と併せて指導される、以下のア・イに示す内容である。

ア 音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えること。(思考力、判断力、表現力等)

イ 音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる音符、休符、記号や用語について、音楽における働きと関わらせて理解すること。(知識)

児童は鑑賞の活動を通してこの〔共通事項〕を学び、また教師は〔共通事項〕を手がかりとして授業を構成する。このことは、各教科に「言語活動」の重要性が組み込まれた平成20年の学習指導要領の改訂以来、音楽科の授業で取り込まれてきたにもかかわらず、特に鑑賞活動において、未だその難しさが指摘されている。例えば飯泉⁴⁾は、鑑賞に関しては何を「聴取」すべきかわからずその場しのぎになってしまうこともあると述べ、川端ら⁵⁾は、鑑賞授業のアンケート調査から、多くの

教員が「音楽を言葉で伝えることの難しさ」を挙げ、特に低学年において、「思うことはあっても言葉で表現できない児童に対しての支援の方法がわからない」といった内容の記述も多かったと報告している。

1.4 目的

筆者らはこれまで、他者と協働しながら音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさなどを考えたりしていく教育方法として、「気づき」「仮説検証」「メタ言語」の機能を引き出すディクトグロス (Dictogloss) に着目し、音楽の分析的聴取とリーディングスキルの関係に関する研究を行ってきた。Wajnryb (1989) によって提唱されたディクトグロスは、まとまりのある文章を聞き、書き取った内容のメモを基にペアまたはグループで元の文章を復元するタスクである。日本の学校教育においても、「気づき」「仮説検証」「メタ言語」の機能を引き出す教室活動⁶⁾として、英語・日本語教育の分野で注目されている。

ディクトグロスを応用した音楽聴取プログラムとして筆者らは、楽曲の途中で音楽を形づくっている要素(音の高低、強弱、音色、リズム等)を変化させた聴取課題及びそれに環境音を重ねたオリジナル課題を制作している。学習者は、聴取する音楽の有する論理性に気づき、提示された断片を組み合わせたか、強弱や音の高低、音色などの音楽的要素を書き込んだりして、提示音楽の言葉による復元を協働して試みる。

このプログラムは、音楽科の鑑賞の授業において何を「聴取」すべきかわからず、言語化することも難しい児童が、「意識を集中して音楽を聴取する」ことを通し、「〔共通事項〕の知識について体験を通して理解し」、「音楽を聴取して感じたことを言語化する力を身につける」ことを促すのではない。本稿では、ディクトグロスを応用した音楽聴取プログラムを繰り返す中での小学校2年生の気づきのメモを分析し、その効果について検証する。

1.4 倫理的配慮

調査においては、まず研究計画・方法に関し、所属機関（調査開始時）の倫理委員会の承諾を得た。調査に関しては、担当者に内諾を得たうえで、調査協力園校の園長・校長及び教頭に対面し、研究の目的と調査方法及び個人情報保護等の説明を口頭で行い、同意書・同意撤回書を配布した上で実施した。

2 方法

2.1 協力者及び調査時期

調査は、2018年の11月～12月、2019年の9～10月に、西日本にある2つの公立小学校2年生を対象として実施した。1校では小規模校（2018年＝8名、2019年＝4名）、もう1校は1学年4クラスのうちの1クラス（2018年＝31名、2019年＝27名）の協力を得た。担任及び音楽専科の教師と教頭により、朝学の時間（20分）に各校共8回

譜例1 2018年 課題曲

<p>①音色変化 AABB (A = ピアノ, B = 鉄琴)</p>	<p>⑤調性変化 AABB (A = 長調, B = 短調)</p>
<p>②大小変化 AABB (A = 大, B = 小)</p>	<p>⑥演奏法変化 AABB (A = テヌート, B = スタッカート)</p>
<p>③テンポ変化 AABB (A = ふつう, B = 速く)</p>	<p>⑦演奏法変化 ABAB (A = テヌート, B = スタッカート)</p>
<p>④高低変化 AABB (A = 中音, B = 高音)</p>	<p>⑧高低変化 ABAB (A = 中音, B = 高音)</p>

ずつ実施された。

2.2 課題曲

児童にとって馴染みのある童謡『ちょうちょう』を使用した。4フレーズで構成されている『ちょうちょう』のメロディーに、小学校2年生において既習の音楽の構成要素（音色、調性、演奏法、高低）を変化させた8課題（譜例1）を制作した。しかしながら「児童が同じ曲の繰り返しに集中力

が低下してしまった」との報告があり、2019年は、音色、調性、演奏法、高低の変化の4課題と、途中から環境音を重ねる4課題を制作した（譜例2）。環境音課題では、各課題に対し2種類の音を順に重ね、児童がその音の風景を想像しながら聴取し、より活発にディクトグロスに取り組むことを期待した。

譜例2 2019年 課題曲

<p>①音色変化 AABB (A = ピアノ, B = 鉄琴)</p>	<p>⑤水+蛙</p>
<p>②調性変化 AABB (A = 長調, B = 短調)</p>	<p>⑥水+声</p>
<p>③演奏法変化 AABB (A = テヌート, B = スタッカート)</p>	<p>⑦風+鳥</p>
<p>④高低変化 AABB (A = 中音, B = 高音)</p>	<p>⑧風+雷雨</p>

2.3 手続き

課題曲の聴取を毎週の朝学（授業前の20分のクラス活動の時間）に、週に1回ずつ8課題を実施した。CDに録音した課題曲は、コンパクトステレオシステム（パナソニック製）を使用し、教室全体に聴こえるように教師により音量がコントロールされた。第1回目の課題では、児童には次のように提示した。

- ①これから、皆さんのよく知っている曲を聴いてもらいます。何の曲でしょう？
- ②そう、『ちょうちょう』ですね。次に聴く曲も、『ちょうちょう』です。でも、さっき聞いた『ちょうちょう』とは少し違います。よく聞いて、何が、どこからどのように変わったのかについて紙に書きましょう。
- ③書きましたか？では、隣の人と、何が、どこからどのように変わったのかを話してみましょう。（ペア学習）
- ④次に、6人組のグループで、何が、どこからどのように変わったのかを話し合ってみましょう。

2回～8回目は、②の教示を「今日聴く曲も、『ちょうちょう』です。よく聞いて、何が、どこからどのように変わったのかについて紙に書きましょう。」と変更し、②～④の活動を実施した。2019年の5回～8回の環境音を含む課題については、②の教示を「今日聴く曲も、『ちょうちょう』です。

よく聴いて、何が、どこからどのように変わったか。そして、どんな場所が思い浮かんだかについて、気づいたことを紙に書きましょう。」と変更し、②～④を行った。両年とも毎回の活動終了後、教師による音楽的特徴の変化の確認を行い、課題曲を再聴することで聴取力の向上を図っている。

3 結果と考察

本節では、課題曲を聴取した児童の気づきのメモを分析することで、児童が、〔共通事項〕の知識について体験を通して理解しているか、また、音楽を聴取して感じたことを言語化する力を身につけているのかについて検証する。

3.1 2018年の調査から

児童は、課題を通し、〔共通事項〕（音楽を特徴づけている要素）の知識を理解し、音楽を言語化する際にそれらを使用できるようになっているのか。そのことを確認するために、2018年の結果から、第4回の音の高低変化と第8回の音の高低変化の児童のメモを比較する。第8回は、音の高低変化について2度目の聴取となる。気づきの変化を確認するために、メモの文字を「もっきん→木琴」のように一部漢字変換し、テキストマイニング⁷⁾を実施した。その結果、それぞれのワードクラウド（出現頻度）は図1及び図2、単語分類の比較は表1のようになった。

表1 第4回高低変化と第8回高低変化の単語分類

第4回 高低変化にだけ出現	第4回 高低変化によく出る	両方によく出る	第8回 高低変化によく出る	第8回 高低変化にだけ出現
違う 遅い 間違える つく 入る おかしい ひくい 悪い 濃い 薄い 速い 変 シャープ 出す 押す 流れる 減る 笑う 間違う な音 スピード 場所 気持ち 音痴	大きい 小さい 途中 面白い テンポ ちょうちょ	音 変わる 低い ピアノ 最初 まま 声 小さい 最後	高い 普通 高い 低い きれいな	上がる 戻る 可愛い うだる かわる くりかえす つぶれる 下がる 使う 入れる 分かれる 弾く 思う 思える 挟む 潰れる 終わる 続く 繰り返す 表す 怖い オクターブ 鉄琴 上 2回 はじめ 木琴 ・ 交代 4つ

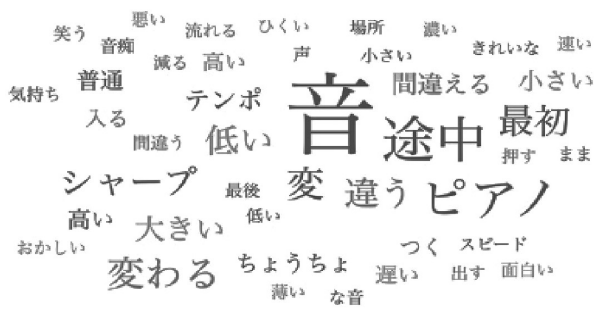


図1 第4回高低変化 ワードクラウド

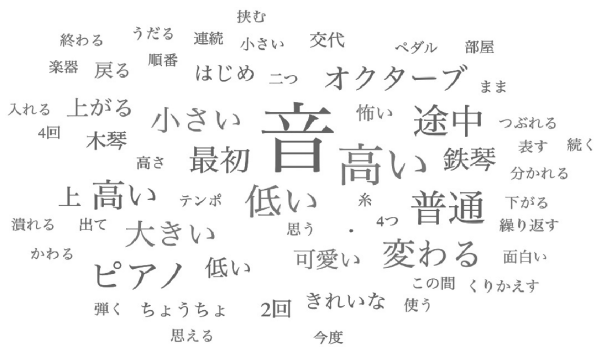


図2 第8回高低変化 ワードクラウド

共通して出現頻度が高いのは、「音」「ピアノ」「最初」「最後」「変わる」「低い」といった単語であるが、第8回では、「高い」「低い」「オクターブ」といった音楽用語や、音が「上がる」「下がる」「繰り返す」「戻る」「終わる」といった楽曲変化の特徴を表す単語が用いられるようになってきている。一方、第4回では、「間違える」「音痴」「面白い」「速い」「遅い」など、音の変化には気づいているものの、それを表現するための適切な言葉が使用されていない。高い音を「速い」、低い音を「遅い」と感じていた児童も、それらが「高い音」「低い音」とであると認識できるようになっていることがわかる。

3.2 2019年の調査から

2019年の調査から、児童が音楽を聴取して感じたことを言語化する力を身につけているのかについて、環境音を含む第5回～第8回の結果を検討する。これらの4課題は、『ちょうちょう』のピアノのメロディーの途中から、第5回：水の音+カエルの鳴き声、第6回：水の音+子どもの声、第7回：風の音+鳥の鳴き声、第8回：風の音+雷雨の音を順に重ねている。

児童がメモに残した文字数は、第5回から順に、905字→1119字→1097字→1483字となっている。第5回から第6回は約200字、第7回から第8回にはおよそ400字増加しており、児童は繰り返し聴く中で、集中して音を聴取し、聴取して感じたことを自分の言葉で表現しようとしていることが窺える。

表2 児童のメモの抜粋

	第5回(水+蛙)	第6回(水+声)	第7回(風+鳥)	第8回(風+雷雨)
A	がっきはおんじだったけどとちゅうからみずとかかえるがなかった。	さいしよはふつうだったけどみずかながれて子どものあそんであるおもしろうなこえがした。	さいしよはふつうだったけどとちゅうからみずかながれて子どものあそんであるおもしろうなこえがした。	さいしよはふつうのピアノだったけど雨がふってかみなりと風のせいですがおもしろい感じがした。なんでかいてうとさいしよはスプレアの音だったとおもったけど台風の音になった。ちょうちょうがにけていったかんじがした。
B	とちゅうで水ながれる音がでてきた。まんなかへんで音がかわった。トイレの水ながれる音がした。	子どものわらい声がきこえた。おふろのおゆをいれるおとがした。	とちゅうでとりのなき声がきこえた。すなあらしの音もきこえた。スプレアの音がきこえた。ナイアガラたきの音。ひよこのなきこえ。うぐいすのなきこえ。	かみなりがなくなった音がすなあらしとすなあらしがきた。かみなりがした。かみなりとすなあらしがきこえた。雨があざあふった音もした。ピアノの音がおおきかったのにすなあらしがきて音がちいさくなった。
C	さいしよらへんからピアノと水の音がきこえて2ばん目のくりかえしのさいごに風のおとがきこえた。	さいしよの音と水の音がきこえて、さいごらへんに子どものような声がきこえた。それで、水ながれてる川みたいだった。	さいしよは、いつもおなじの音だったのがスプレアとかきこえたみたいなおとがして、たまにこたりのようなおとがした。	さいしよはスプレアみたいなおとだったけど、たいふうの音がでてきて、どどんつよくなっているような音とかみなりのゴロゴロの音とかきこえて音がながれている。

表2は、3人の児童のメモである。児童のメモは、『ちょうちょう』のピアノのメロディーに重ねられる様々な環境音が列挙されているだけではない。砂嵐や台風のような音を聴いて、蝶々が逃げていったと想像する児童A、水の音と和やかな子ども笑い声の重なりから風呂を想像した児童B、一方それを川遊びに感じた児童Cなど、3人は、聴取した音を関連付け、連想を膨らませており、それぞれの文章から、児童の豊かな表現力が窺える。

さらに児童Aは、順を追って音のイメージを記述するだけではなく、何故そう思ったのかという理由を述べようと試みている。また、児童Bは、大きく聴こえたピアノの音が、砂嵐の音が加わることで小さく聴こえたと、音の状態を比較した記述をしている。これらのメモから、本プログラムは児童に、意識を集中し、課題曲を分析的に聴取する姿勢を促したのではないかと考えられる。

3.3 プログラムの経験と児童の変化

— 実践者の振り返り —

本調査の協力校からは、「今後も毎週曜日や時間を決めて取り組んでいけたら良いと思う」、「もっといろいろな音楽や環境音との組み合わせなどを聴かせることで、国語科や作文などのスキルアップにつながるのではないかと思う」といった感想をいただいている。本項では児童の変容を中心に、2度のプログラムを実施した実践者の振り返りを、①音楽科の授業、②音楽外の教科、③担任等教職員の感想の3視点から提示する。

① 音楽科の授業に関して

鑑賞の授業での児童の反応が、目に見えてよくなった。それまでは気づかなかった音楽的特徴(音色や曲想を含む)の変化にも気づくようになった。さらに、その変化を表現しようと言葉にする力も向上していると感じる。

また、音楽が聞こえると、自分が感じたことを自由に身体表現する様子が見られるようになった。鑑賞の授業では、自分の言葉で気づいたことや感じたことを書いたり発表したりできる児童が増えた。正しい答えを探そうとするのではなく、自分の感じたことに対して自信をもつことのできる児童が増えた。

② 音楽外の教科に関して

それまでは気にすることのなかった事象(音以外でも)に対しても、意識を向けることができるようになってきたと感じる。表現する力も、聞いた音や音の変化を言葉で表そうと考えることを通して、向上しているように感じる。

児童の変容は、国語科のなかで多く現れた。詩を書く際に、「～のように」と比喩を用いたり、擬態語を上手に使う様子を表そうとしたりする児童が増えた。グループ活動では、友達の発表を聞いて得た意見を参考にして、感想や考えを自分の言葉で書くことができるようになった。朝の回で実施している五文スピーチでも、「～のように」、「～みたいに」といった言葉を用いて、様子や状況を詳しく話すことができるようになった。

③ 担任等教職員からの感想

児童の、注意深く聞こうとする力が向上していると感じている。本プログラムは、集中して音楽を聴くだけでなく、状況を表す言葉を習得できる可能性が大きいと考えられる。今までは気付かなかったような変化にも気付くようになり、それを言語化するようになってきた。また、それまで音楽で活躍することのできなかった児童が、今回の経験によって、積極的に活動に参加し発言するようになった。こうした児童の変化が、教師自身のブラッシュアップにもつながっている(児童の表現・注意深く聞こう・読もうとしている姿を見守る態度、声掛けなど)。

4 総合考察：研究のまとめと今度の課題

本研究では、学習者が提示された音楽の言葉による復元を協同して取り組む(ディクトグロス)音楽聴取プログラムを制作し、小学校2年生を対象とした調査を実施した。調査結果は、このプログラムを経験することにより、児童が「意識を集中して音楽を聴取する」ことを学び、「[共通事項]の知識を、体験を通して理解し」、「音楽を聴取して感じたことを言語化する力を身につける」という3つの仮説を支持するものとなった。以下、本研究のまとめと今後の課題を「育成を目指す資質・能力」の3つの柱に準じて述べる。

4.1 知識・技能

調査結果から、本プログラムを経験した児童の言語活動は活性化し、課題曲を聴いて感じたことや気づいたことについて音楽用語を使用し表現したり、豊かな表現で記述したりするようになってきたことがわかった。本プログラムは、音楽科における鑑賞教育を目的とした内容ではない。しかしながら、短い課題曲にある「音楽を構成する要素」の変化に気づくことの経験が、芸術作品の聴取においても、その聴き方を明確にし、音楽の良さを感じ取ることにつながるのではないかと考えられる。

音楽科学習指導要領において、[共通事項]は、

表現と鑑賞の指導を通して児童に身につけさせるように明記されている。本プログラムは、児童が音楽活動を行うにあたってのレディネス(学習基盤)を形成するものである。したがって、各学年の学習内容に応じた内容構成を検討し、プログラムの充実を図ることが今後の課題である。

4.2 思考力・判断力・表現力等

担任教師は、「今までは気付かなかったような変化にも気付くようになり、それを言語化するようになってきた」と述べている。そのことから、本プログラムでの経験が、音楽だけではなく、生活の中での聴覚的な気づきの広がりをもたらし、気づきの広がりや言葉の豊かさにつながっているのではないかと考えられる。

20世紀の終わりに、上條晴夫氏によって提唱された『見たこと作文』では、体験したことではなく見たことを文章にすることによって、児童の言語表現力が向上することが証明されている⁸⁾。「見たこと」とは視覚的に観察した事実である。本プログラムは、「聴いたこと」の言語化である。「聴覚による観察」とも換言できるだろう。

平成29年改訂の小学校音楽科学習指導要領では、「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」の育成が謳われている。協力校から「もっといろいろな音楽や環境音との組み合わせなどを聴かせることで、国語科や作文などのスキルアップにつながるのではないかと思います」との感想が寄せられているように、課題曲に多様な環境音を重ねることや、音楽的な知覚がブラッシュアップするような構成を工夫することで、音楽という教科を超えて、「音を注意深く聴く」行為と、児童の思考力・判断力・表現力等との関連について追究していきたい。

4.3 学びに向かう力・人間性等

ディクトグロスを応用した本プログラムでは、個人メモ→ペアトーク→グループトークの順に話し合いを広げる。教師の振り返りに「グループ活動では、友達の発表を聞いて得た意見を参考にし

て、感想や考えを自分の言葉で書くことができるようになった」とあるように、話し合いの中での学びあいの成果が、気づきや表現の豊かさにつながったのではないかと考えられる。

聴取すべき対象に集中して耳を傾け、聴いたことを相手に伝える言葉に置き換える。仲間と同じ対象に向き合い、自分が感じたことを伝えるとともに、他者の意見に共感し、その良さを自身の学びにつないでいく。こうした協同的共感的思考は、音楽科はもちろん様々な教科において、発揮されるともである。

今後は、本プログラムが音楽の児童の音楽表現や鑑賞活動にどのような効果をもたらすのかを実証していくと共に、他教科での児童の学びの姿の変容についても調査していきたいと考えている。

引用文献

- 1) 文部科学省(2018):小学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編、東洋館出版社。
- 2) 文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/015.pdf (2006/2/3登録、情報取得2020/9/4):15。
- 3) 吉田孝(2009):音楽科における「言語活動の充実」、音楽鑑賞教育4月号:18-21。
- 4) 飯泉祐美子(2011):小学校1学年及び2学年の音楽科教育における「言語活動の充実」、千葉敬愛短期大学紀要、(33):35-43。
- 5) 川端真由美・柴辻純子(2015):小学校音楽科の鑑賞教育における課題—鑑賞指導法への提言(1)—、植草学園大学研究紀要、第7巻:5-13。
- 6) 横山紀子(1998):言語学習におけるインプットとアウトプットの果たす役割—効果的な「気づき」を生じさせる教室活動を求めて—、日本語国際センター紀要、8号:67-80。
- 7) テキストマイニングには以下の無料オンラインソフトを使用した:User Local社のAIテキストマイニングツール(<https://textmining.userlocal.jp/>)

- 8) 上條晴夫(1990):『見たこと作文でふしぎ発見』、学事出版.

謝辞

調査にご協力くださいました小学校の皆さまに、心より御礼申し上げます。

付記

本研究は科学研究費(挑戦的研究(萌芽)/課題番号 17K18662/研究代表者:吉永)による助成を受けている。

(令和2年 9月23日受付)

(令和2年10月12日受理)